

Institutional Research

# IR News



## 問いから始めるIR

教育・学生支援機構教育企画室 上月 翔太

昨夏、『大学IR入門』と題した著書を刊行しました。本書には編者としてかわり、また、自身でも4つの章を執筆しました。これまで行ってきたIR担当者向けの研修の成果であり、今後の育成の基盤になるかと思えます。

本書の3章で「IRのための問い」について執筆しました。問いをIRの諸活動の起点と位置づけ、実際の調査設計へのつながりを説明しています。本章の執筆の過程で、問いへの意識が、IRの意思決定への貢献を左右する要素だと考えるにいたりました。大学に所属する

さまざまな人々がもつ問いに答えられれば、IRが活用されるのではないかと。逆に誰も問うていない中にデータだけ提供しても、十分に参照されることは難しいかもしれません。

そこでさまざまな関係者の問題意識や関心を問いに変換することが大切です。IR担当者による独自の問いだけでなく、「あの人は今、どのような問いをもっているだろうか」と関係者の視点に立った問いがより重要でしょう。また、すでにルーティンとして行われているIR業務であっても、それが関係者の問いにどう応え

うるかという観点から評価することもできるでしょう。どのようなデータがあるのか、どう分析すればよいのかといったことを考えるより前に、学内にある多様な問いを拾い上げることは、IRに携わる者として忘れずにいたいところ です。

## 書籍のご案内

### 第I部 IRの特徴と実践の指針

- 1章 大学におけるIR
- 2章 IRの指針とプロセス
- 3章 IRのための問い

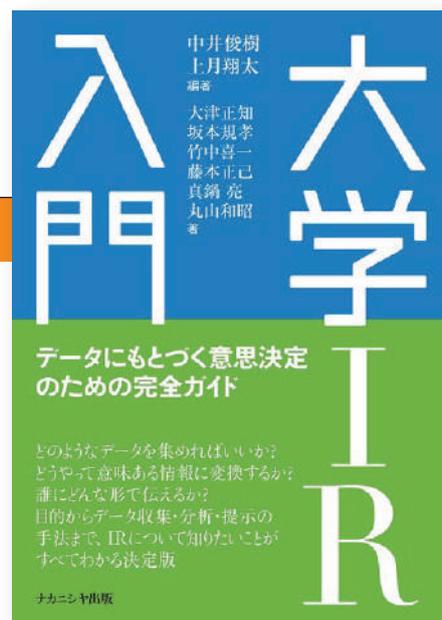
### 第II部 IRの具体的方法

- 4章 大学の基本情報の提供
- 5章 アンケート調査の設計と実施
- 6章 データ分析の基本
- 7章 テキストデータの分析
- 8章 他大学との比較
- 9章 中途退学の分析
- 10章 教育活動の経済分析
- 11章 目標管理の支援
- 12章 報告と活用支援

### 第III部 IRの体制と推進

- 13章 IR部門の運営体制
- 14章 IR活用の促進と発展

### 付録 IR実施に役立つ資料



中井俊樹・上月翔太編

『大学IR入門ーデータにもとづく意思決定のための完全ガイド』

ナカニシヤ出版、2025年

## — 教職員能力開発拠点事業報告 —

# インスティテューショナル・リサーチャー養成講座を開催しました

2025年10月25日(土)、26日(日)に愛媛大学城北キャンパスにて、教職員能力開発拠点事業「インスティテューショナル・リサーチャー養成講座」を開催しました(共催:近畿大学IR・教育支援センター)。各大学のIR担当者を対象に、IRの意義や方法、データ分析や報告に関する実践的な知識とともに、自大学におけるIRを改善するための具体的手法を身につけることを目的とした研修です。愛媛大学教育企画室の教員(中井俊樹、上月翔太、真鍋亮)の他、共催の近畿大学IR・教育支援センターの竹中喜一氏、山口大学教育・学生支援機構教学マネジメント室の藤本正己氏を加えた5名が講師を務めました。北海道から九州まで全国から10名の受講者が参加しました。

研修に先立って受講者は事前課題に取り組みます。事前課題は指定テキスト『大学IR入門』の講読、自大学のIRの取り組みと課題の整理から構成され、初日にその内容を発表することとなっています。

愛媛大学での研修の前半では各講師による講義が行われました(表)。講義セッションは9つあり、各テーマに関連する実際の事例の紹介や実践上の困難やそれに対する工夫が講師から示された他、参加者同士の実践例や工夫を共有することも行われました。セッションの前後や空き時間には講師へ質問したり、他の受講者に相談したりする受講者の姿も見られました。

研修の後半は、各受講者が自大学のIRの課題解決に向けたアクションプランを作成します。

アクションプランの作成は研修と実践を結びつける本研修の特徴的な取り組みです。各受講者はそれぞれの立場から自大学の課題解決に貢献する方法を具体的に検討します。作成中には講師が個別面談を通じて、アクションプランの作成を支援しました。作成したアクションプ

ランは各グループで発表し、受講者相互でディスカッションも行いました。アクションプランでは、「アセスメントプランの作成」や「学生や教職員へのフィードバックの強化」「IRの体制整備」など、IRに関する多岐にわたる内容が扱われました。

表 インスティテューショナル・リサーチャー養成講座の内容

1日目	2日目
開会挨拶・オリエンテーション 「IRとその意義を理解する」 ワーク「IRの課題を共有する」 「問いから設計へ」 「基本的な分析を行う」 「テキストデータを分析する」 「アンケートを実施する」 「中途退学を予防する」 「他大学と比較する」	「結果の活用を支援する」 「IRの活用を促進する」 ワーク「IRの課題解決を検討する」 ワーク「まとめとふりかえり」 閉会挨拶・クロージング

研修を終えてのアンケートでは、回答者全員が本研修に対して満足しているとの回答を得ました。また自由記述からはIRに関する知識の体系的な獲得のみならず、講師や他の受講者とのネットワーク形成、自大学の状況の客観視などにおいても有益であったことがうかがわれます。

インスティテューショナル・リサーチャー養成講座をはじめとした専門人材育成について、教

職員能力開発拠点では新たに専門人材認定事業を始めました(注)。研修の受講と所定の実務経験を有する方に、審査を経て「教職員能力開発拠点認定インスティテューショナル・リサーチャー」の称号を付与するものです。各職場における活動の後押しやふりかえりの機会ともなります。こうした制度を活用しながら、各受講者の継続的な学び、そして各大学におけるIRの発展に貢献していきたいと考えています。



(注)愛媛大学教育企画室ウェブサイト「教職員能力開発拠点専門人材の認定」<https://web.opar.ehime-u.ac.jp/activity/certification/>

## これからの学生海外派遣と受け入れ、 学内での短期国際共修で豊かな国際交流経験を

国際連携推進機構 ヒディング アドリアナ

日本にいる外国人留学生の数は2025年6月の時点で、435,203人で過去最多となっています。円安により生活費が欧米ほど高くなく、治安もよく、留学先としての日本の魅力は高まっています。

一方で、現在、日本人学生にとっての海外留学は決して容易ではありません。ロシアとの交流は停止したままですし、昔から留学先として人気が高いアメリカも入国にはSNS上の発言が留意されるようになり、2025年にはビザ申請さえできない時期もありました。円安の影響で経済的なハードルも以前より高くなっています。国際化の時代とはいえ、海外留学する学生数がコロナ前の水準に戻るのはなかなか難しい状況です。

長期留学は経済的な負担も高く、かつ4年での卒業を望む学生が多いため、学生の多くは海外の語学学校の短期プログラムを選択します。しかし、現地のクラスは日本人ばかりで現地の人々と有意義な交流がほとんどできなかったなど、期待外れの結果となることもあります。

このような問題を解決し学生の交流の経験を豊かにするために、国際共修はとても優れた方法です。国際共修では、留学生や在校生を含め、さまざまなバックグラウンドをもつ人々が、グループワークやプロジェクトを通してコミュニケーションを図り、相互理解を深めます。愛媛大学の派遣・受け入れプログラムの多くもこの国際共修を目的としています。例えば、SUIJIというプログラムでは、インドネシアと日本の学生が、両国の農山漁村に滞在し、言語・

文化・専門の違いを超えて、地域が直面する課題に取り組みながら共に学びます。現地の人々との交流は、学生に真にグローバルな視点を与えてくれる、非常に刺激的な経験です。

より多くの学生に国際共修を経験してもらうためには、交換留学や短期プログラムで来学する留学生を積極的に愛媛大学の授業に参加してもらうことが重要です。2020年から開講の共通教育「異文化コミュニケーション」の授業では、留学生がゲストスピーカーになり、履修者がインタビューするかたちをとっています。その結果、授業に参加した留学生の出身国に対するイメージが変化し、関心が高まったこと、さらに自分自身も海外に行ってみたくなったことなどが学生のフィードバックから示されています。

2025年にこの授業の一環で、45分×4回のセッションで、アメリカからの交換留学生4人、フィリピン、コロンビア、インドからそれぞれ1人がゲストスピーカーになりました。さらに韓国・蔚山大学からの短期留学生15人と90分の間の相互インタビューを行い、その経験についてアンケートをとったところ、学生(N=28人)の79%が「韓国への関心が高まった」と回答し、18%が「韓国への留学に興味を持つようになった」と答えました。この結果は、非常に短期間の交流に参加した少人数の学生から得られたものですが、それでもなお、豊かな学びの経験となり得ることを示しています。学内での実現可能性の高い、短期の国際共修の効果を確認できたことは、今後この取り組みをさらに発展させていく強固な基盤となると考えています。

## 全国学生調査について

教育・学生支援機構教育企画室 上月 翔太

令和7年から文部科学省は全国の大学の学生を対象としたアンケート調査「全国学生調査」を実施しています。本調査は令和元年から4度の試行実施を経て、令和7年から本格実施となっています。『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』答申(2018)での提言を受けて、以下の4つの活用が目的とされています。

### 全国学生調査の目的

- (1) 各大学が自大学の学生の実態や意識や他大学との比較分析を踏まえた教育改善に活用すること
- (2) 大学進学希望者やその保護者あるいは地域社会、産業界、海外の留学関係者等から、各大学における学生の学修成果や大学全体の教育成果にこそ関心を持ってもらい、大学に対する理解を深めてもらうこと
- (3) 国が今後の政策立案に際しての基礎資料として活用すること
- (4) 学生一人一人が「何を学び、身に付けることができたか」を振り返ることで今後の学修や大学生活をより充実したものにしてもらうことや、卒業後の社会における自らの姿を考える上での一つの契機とすること

文部科学省ウェブサイト「全国学生調査」より [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/chousa/1421136.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/chousa/1421136.htm) (2026年1月6日確認)

本調査は2年次と最終年次の2つの学年の学生を対象に行われ、令和7年度実施分では表のような設問となっています。

表 令和7年度全国学生調査設問

#### 問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか。

(選択肢/4:よくあった 3:ある程度あった 2:あまりなかった 1:なかった)

- 1-1 理解がしやすいように教え方が工夫されていた。
- 1-2 予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される。
- 1-3 課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される。
- 1-4 グループワークやディスカッションの機会がある。
- 1-5 質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある。
- 1-6 ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある。

#### 問2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。経験していない場合は0を選択してください。

(選択肢/4:有用だった 3:ある程度有用だった 2:あまり有用ではなかった 1:有用ではなかった 0:経験していない)

- 2-1 インターンシップ(5日間以上)
- 2-2 海外留学・海外研修(短期も含む)
- 2-3 主に英語で行われる授業の履修(語学科目を除く)

### 問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力などが身に付いたと思いますか。

(選択肢/4:身に付いた 3:ある程度身に付いた 2:あまり身に付いていない 1:身に付いていない)

- 3-1 専門分野に関する知識・理解
- 3-2 将来の仕事につながるような知識・スキル・態度・価値観
- 3-3 文献・資料を収集・分析する力
- 3-4 論理的に文章を書く力
- 3-5 人に分かりやすく話す力
- 3-6 外国語を使う力
- 3-7 数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能
- 3-8 問題を見つけて解決方法を考える力
- 3-9 他者と協働する力
- 3-10 幅広い知識、ものの見方
- 3-11 異なる文化に関する知識・理解

### 問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。

(選択肢/4:そう思う 3:ある程度そう思う 2:あまりそうは思わない 1:そうは思わない)

- 4-1 卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している。
- 4-2 授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている。
- 4-3 教職員が熱心に教育に取り組んでいる。
- 4-4 大学の学びによって成長を実感している。

### 問5 今年度後期の授業期間中の平均的な1週間(7日間)の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

(選択肢/1:0時間 2:1~5時間 3:6~10時間 4:11~15時間 5:16~20時間 6:21~30時間 7:31時間以上)

- 5-1 授業への出席(実験・実習、オンライン授業を含む)
- 5-2 卒業論文・卒業研究・卒業制作
- 5-3 予習・復習・課題など授業に関する学習(卒業論文等は除く)
- 5-4 授業と直接関係しない自主的な学習(学問に関係する読書やディスカッション、実技の練習、資格試験の勉強等)
- 5-5 部活動/サークル活動
- 5-6 アルバイト/定職

本調査では、設問ごとにすぐれた結果を挙げた大学について、学部(学科)単位で一覧化したポジティブリストを作成し、公表することとなっています。教育改善に加え、進学希望者や地域社会、産業界などへの情報提供での活用が目指されています。第4回試行実施時(令和6年度実施)に作成されたポジティブリストにおいて、愛媛大学も7つの項目で4学部がリスト入りをしています。

本学では、令和7年度の本格実施分から、本学が独自に行ってきた卒業予定者アンケート、学年末アンケートと統合して全国学生調査に参加しています。調査内容と本学の状況との整合性などに注意を要するものの、全国規模の調査に参加することで、大学間での学習状況の比較が行いやすくなると期待されます。また、2年次と最終年次の2度にわたる調査のため、学生の変化や成長を把握することも可能となります。

第4回試行実施の結果を一部ご紹介します。教育上の工夫や配慮について、「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」の肯定的回答が全国平均に比してやや低い結果にあることが確認されました。本学独自の学生調査では、教員からのフィードバックについて過去に一定程度満足度の向上がみられましたが、全国的な水準にはまだ達していない可能性が示唆されます。一方で、身に付けた能力を問う設問ではほとんどの項目が平均より高い肯定的回答を得ており、一定の成長実感を得られていることがわかります(図)。回答者数がまだ十分とはいえ(回答率15.3%)、本学全体の状況を示すとは必ずしも言えない面もありますが、全国の大学との比較によって、より客観的な状況把握ができる点は本学の課題のみならず強みを示すことにもつながるでしょう。指導学生への声かけなど、学生調査へのご協力を改めてお願いいたします。

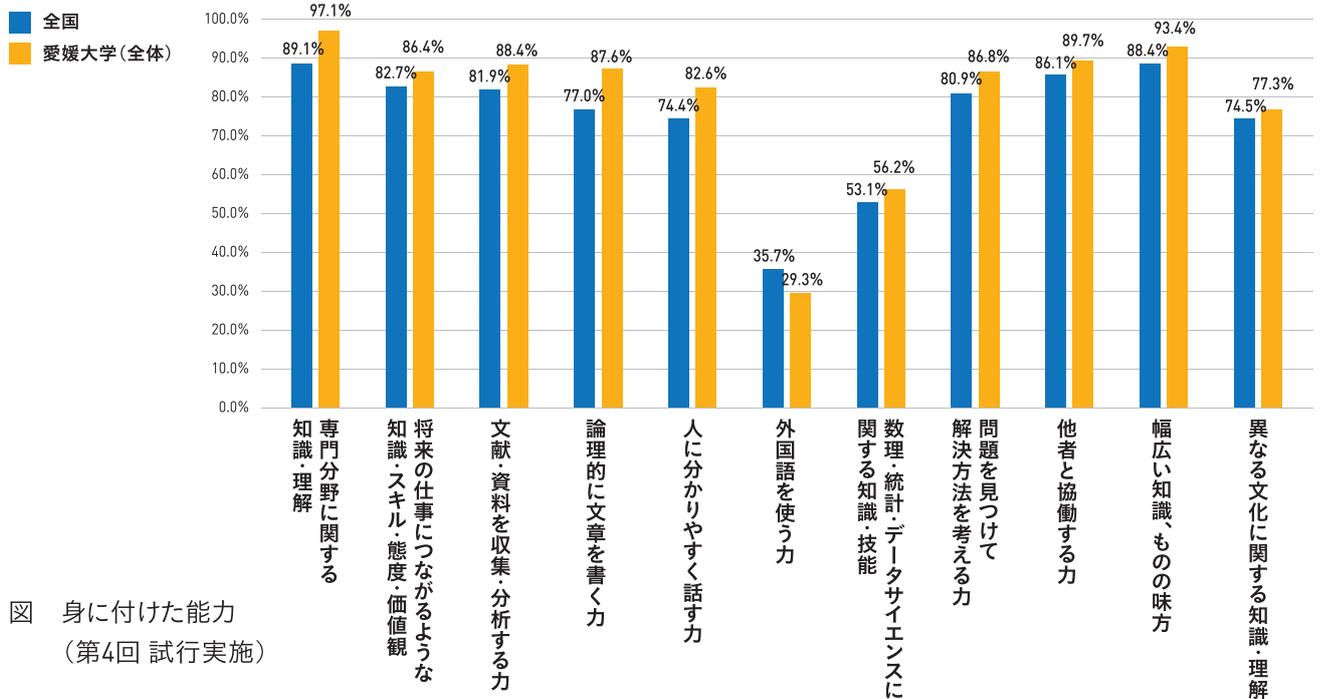


図 身に付けた能力  
(第4回 試行実施)

## — 教育企画室事業報告 —

# 共同研究「**教学データを活用した アーリーアラートシステムの開発**」について

教育・学生支援機構教育企画室 真鍋 亮

愛媛大学教育・学生支援機構 教育企画室は、令和7年10月1日より日本システム技術株式会社と共同で、教学データを活用した学習支援を中心とする学生支援の高度化を目的とした共同研究を開始しました。本研究は、学生の修学状況を多面的に把握し、支援が必要となる兆しを早期に捉え、適切な時期に学習支援につなげる仕組みの構築を目指すものです。

教育企画室ではこれまで、卒業予測モデル「卒業予報」をはじめ、成績や履修状況等の教学データを基に、学生の学習状況を可視化する教学IRの取組を進めてきました。本研究では、こうした知見と、日本システム技術株式会社が有するデータ分析・システム開発の技術を融合させ、学生をつまずきを早期に把握するアーリーアラートシステムの開発に取り組みます。

本研究の成果は、単なる分析結果の提示にとどまらず、学生自身の学習状況の理解や、教職員による声かけ、面談等の判断を支える学習支援

ツールとしての活用を重視しています。さらに、得られた知見を教育課題の抽出や授業設計の改善に生かすことで、教育の質向上にもつなげていきます。本研究は令和10年3月31日までを予定しており、今後は全国の大学への展開も視野に入れ、高等教育における学習支援の基盤構築に貢献していきます。

※「卒業予報」は、国立大学法人愛媛大学の登録商標です(登録 6885680)。



記者発表での記念撮影

## 一 ご案内

### 「SPODフォーラム2026」

SPODフォーラム2026は、2026年8月26日(水)～28日(金)の日程で、愛媛大学城北キャンパスにて開催を予定しています。ぜひともご参加ください。

### 「インスティテューショナル・リサーチャー養成講座」

2026年9月に本研修を開催予定です。ぼっちゃんメーリングリスト、愛媛大学教育企画室ウェブサイトなどでご案内します。

### 「教職員能力開発拠点専門人材の認定」

文部科学省教育関係共同利用拠点事業の一環として、教職員能力開発拠点専門人材の認定を行っています。拠点事業の研修を修了した教職員に対し、知識・経験に関する審査によって専門人材として認定し、称号を付与する制度です。IRの他、FD、SD、カリキュラム・コーディネート、アカデミック・アドバイジングの領域についても認定を行っています。

認定までの 流れ ※一部変更になる 場合がございます。	2026年 8月 ……………	事務局から必要書類、審査スケジュール等についてご案内
	2026年10月 ……………	必要書類の提出(認定申請書等)
	2026年11月～2027年1月 ……	審査委員会による書類審査及び面接審査(オンライン)
	2027年 2月 ……………	共同利用運営委員会による審議、認定
	2027年 3月 ……………	認定証書の授与

詳しくは愛媛大学教育企画室ウェブサイト「教職員能力開発拠点専門人材の認定」をご覧ください。  
<https://web.opar.ehime-u.ac.jp/activity/certification/>

### 「ぼっちゃんメーリングリスト」

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室が運用するメーリングリストです。教職員能力開発(FD・SD)に関する情報を、メーリングリスト会員にお届けします。また、メーリングリスト会員は、教職員能力開発(FD・SD)に関する情報を投稿し、配信することもできます。以下のURLよりぜひご登録ください。



<https://web.opar.ehime-u.ac.jp/maillinglist/>

### 「愛媛大学FD・SDチャンネル」(YouTube)

愛媛大学教育企画室が関連する各種FD・SDに関する動画を配信します。IR業務に関連する動画も公開していますので、チャンネル登録をお願いします。

IR業務関連動画 (一部)	「IRって?」「IRの流れ」「データを集めて整理する」「データを分析する」 「活用につながる報告」「IR・AIを活用した中途退学予防」
------------------	--



[https://www.youtube.com/@aidai\\_fdsd/videos](https://www.youtube.com/@aidai_fdsd/videos)

IRを教育改善の場面で有効にご活用いただくためにも、ご意見、ご感想、情報等をお寄せください。

IR News 第13号 〈2026年3月発行〉

発行：愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室(教職員能力開発拠点)

編集：上月 翔太

〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

TEL 089-927-8922 E-MAIL [opar@stu.ehime-u.ac.jp](mailto:opar@stu.ehime-u.ac.jp) URL <https://web.opar.ehime-u.ac.jp/>